

第 6 回 大学入試のあり方に関する検討会議について

2020 年 4 月 23 日に大学入試のあり方に関する検討会議が開催された。
15:00 から 17:00 までの予定で、文部科学省 15 階特別会議室で行われた。
今回も前回に引き続きコロナウィルス感染拡大防止で傍聴者は認められず、ライブ配信での中継となった。

今回の議題は以下の通りである。

1. 来年度大学入学者選抜における新型コロナウイルス感染症への対応状況
2. 外部有識者・団体からのヒアリングについて
3. 英語 4 技能評価及び記述式問題の実態調査の進め方について
4. 委員からの意見発表
5. 大学入試センターからの説明
6. 自由討論

今回も前回に引き続き WEB 会議方式で行われ、文科省の会議室からは萩生田大臣と三島座長が、他の委員はネットを経由して参加した。

まずは議題 1 として、「来年度の大学入試の状況」について事務局より報告があった。
新型コロナウイルスの影響で休校となっている学校が多く、出席日数の不足や部活動での大会中止、各種検定試験の中止などがあり、令和 3 年度の総合型選抜（AO 入試）や学校推薦型選抜（推薦入試）への影響があることが考えられる。受験者に不利益がないよう大学へ配慮を要請する点について、調整が整い次第周知する予定である。

次に議題 2 として、「外部有識者・団体からのヒアリング」について、前回提案されたものに委員からの意見を反映させた修正案が示された。
今後は、この案に基づき座長及び副座長で相談し、個別にヒアリングの依頼を行うことで了承された。

続いて議題 3 として、「英語 4 技能評価及び記述式問題の実態調査の進め方」について資料 2 をもとに説明があった。これは前回の会議において、これまでに文科省が用いていたデータが不十分であるという委員の指摘から、文科省で正確なデータを取りまとめてほしいとの要望があったことをうけて提案されたものである。7 名の委員（川嶋委員、島田委員、清水委員、末富委員、両角委員、渡部委員、柴田委員）の知見を活かしつつ調査を行っていく予定である。
これについては、匿名化を明記し、自由記載欄を設けてほしいという意見（小林委員）や、

多面的な評価の在り方に関する協力者会議とも調整して実施してほしいという意見（川嶋委員）、教科レベルにブレイクダウンして見るのが大事という意見（清水委員）があった。

15:35 頃より議題 4 として、清水委員（筑波大学）、益戸委員（UiPath 株式会社）、渡部委員（上智大学）の 3 名が事前に提出した資料に基づき、それぞれ 10 分程度の意見発表を行い、その後に質疑応答が行われた。

主な発表内容と質疑応答は以下の通り。

- 清水委員：主に数学の記述式問題の課題について述べた。記述式といっても国語と数学では仕組みも教科の特性も大きく異なっている。試行調査では、新学習指導要領に基づいて、日常の事象を数学化する能力などを見る問題が行われたが、実装される中で変化してしまった。現行のセンター試験も完成度が高く、十分機能している。共通テストへの記述式の導入は制度上の限界があるので、個別入試との役割分担をすべきだ。
- 益戸委員：経済界の立場から意見を述べる。高大接続改革を考えるときには社会との接続を意識すべきである。英語の 4 技能については、大学ではリーディングが大事かもしれないが、社会に出ると会議で議論やインバウンド対応の中で話す能力が必要とされている。しかし、話す力は十分でないのが実情である。記述式については容易に解決できない課題であるので、個別試験での出題を促す方策を考えた方がよい。
- 渡部委員：英語民間試験は共通テストの代わりにはならないと断言する。CEFR では測定する側面や方法の異なる試験を比較することはできないし、実施の条件が異なるために公平性も確保できない。テストの種類が変われば、国別のランキングも変わることからわかる。また、4 技能はそれぞれ独立の能力ではなく、互いに関連しあっている。TOEFL や IELTS はアカデミックな能力を測る試験であり、大学生以上が多く受けているので、大学の英語教育が機能していないのではないかともいえる。
- 質疑応答：
 - （牧田委員）英語を必要とする企業は大企業に偏っている。参考資料の TOEIC のデータは大企業が半数を占めるので、中小企業も含めれば数値が下がるのではないか？
 - （益戸委員）ご指摘の通り下がると思う。しかし、レストランや商店などでも英語ができたらよかったのにと声を多く聞く。
 - （末富委員）数学の試行調査で文脈を読み取る能力は国語の読解力なのではないか？数学の能力を測っているのか？
 - （清水委員）国語的な読解力の一面もあるが、日常の中から数学的な関係をつか

まえて表現する力を数学的活動と見ることができる。

(末富委員) 産業界として大学とのコミュニケーションの在り方は？

→ (益戸委員) これまでも経済界との間に入る努力をしてきた。大学と一体感を持って社会人を育てるような動きはあるが、まだ始まったばかり。

(川嶋委員) 大学での英語教育の専門家が大学の英語教育は機能していないと発言することは大変ショッキングであった。

16:30 頃に議題 5 として、大学入試センター理事長の山本委員より今後の議論の参考にしてもらうためセンター試験の現状についての説明があった。

センター試験の利用大学はこの 30 年間で 6 倍に増え、全高校生のおよそ 1/3 が利用している。また、終了後には自己評価と外部評価を行っており、一定の評価も得ている。さらに配慮の必要な受験者の数も増加の傾向にあり、それに対応している。最後に私見として、入学者選抜で学習指導要領の達成度を測ることは目的の一部に過ぎないと述べた。

山本委員の発表が終了したところで、萩生田大臣が退席し、その後、質疑応答があった。その概要は以下の通りである。

● 質疑応答：

(柴田委員) センター試験は競争試験であって、資格試験ではないということで間違いないか？

→ (山本委員) 順位をつけなければならないので競争試験である。達成度を測ることは大きな目的であり、一部に過ぎないというのはあくまで私見である。

(末富委員) そもそもセンター試験の完成度は高いと言われているが、共通テストになることで本質的に何が変容するのか？

→ (山本委員) 択一式であり、知識しか問うていないという指摘もあった。センター試験のどこが悪いのかという議論があってもよかった。

(小林委員) 記述式として英語のライティング試験も可能か？

→ (山本委員) 4 技能は分けることはできない。全体を通していろいろな技能が見られるようにとけこませたような作題にしている。

(柴田委員) センター試験は硬直化しているという指摘もあった。そろそろ見直す時期にあったのではないか？

→ (山本委員) このままでいいとは思っていない。シンプルな形でメッセージ性のあるものが重要だと考えている。

議題 6 に予定されていた自由討論は、終了時間となってしまったため前回と同様に行われなかった。

次回の第7回会議は5月14日(木)に開催される予定である。時間についてはヒアリング者との調整が必要なため未定である。

